

アフリカの人口高齢化：健康・生活・ケアの現在と未来

増田研

長崎大学

Population Aging in Africa: The Present and Future of Health, Life and Care

Ken Masuda

Nagasaki University

このフォーラムが取り上げるのはアフリカにおける社会の高齢化である。すでに超高齢社会の段階をむかえている先進国と比べると、アフリカ社会の高齢化は実感をとまなう話ではないだろう。だが、開発途上国における 60 歳以上人口の増加率は高い。たとえば 2050 年のエチオピアでは 60 歳以上人口の比率が 7%、2100 年には 23%と「超高齢社会」の仲間入りをするのが予測されている。

人口高齢化と少子化は不可分である。人口高齢化は、全般的な健康状態の向上による長寿命化、多産傾向で生まれた世代が年齢を重ねること、その後の出生率の低下によってもたらされる高齢者人口比率の増加である。現状ではアフリカの多産傾向は続いていて、しばらくはその傾向が続くが、人口予測によれば今世紀半ばごろからアフリカ諸国においても人口ピラミッドの形状が変化する。すなわち、この多産傾向は永続的ではない。アフリカでもいずれは全体として少子化に向かうことになり、高齢化が進むと予測される。

アフリカ諸国においても近年、年金制度などの社会保障の整備が着手されている。多くの研究がアフリカの将来的な人口高齢化を見越して、高齢者の健康、ケア、労働、社会保障などを喫緊の課題として挙げている。その一方で、グローバルヘルスの多様な展開によりアフリカ諸国における医療供給は断片化しており、その延長線上に不統一な社会保障が展開されることへの懸念がある。

アフリカにおける老年学研究は 1980 年代から着手された。これまでの知見はおおよそ次のようにまとめられる。(1)高齢者の多くは農村部に存在し、引退せず働いている、(2)年金を受給する高齢者は極めて少ない、(3)貧困層と女性高齢者の脆弱性が高い、(4)若年層の都市への流入が、農村部での高齢者ケアを手薄にしている、(5)高齢者を敬う態度は、若い世代において薄れつつある、(6)祖父母が孫の世話をする世代スキップ世帯が増加している。最後の点は、HIV/AIDS によって親を失った子供が祖父母の世話になるという世帯構成の急増を示している。

こうした指摘は多くの先行研究に共通しており、アフリカの人口高齢化についての基礎的な論点はすでに出尽くしている感がある。もちろん探求されていないことも多い。まず多くの研究がセンサスに基づくものであり、傾向を割り出すことにとどまっているうえ、国家単位での社会保障に関する議論が先行している。民族誌的なアプローチによる詳細な研究はほぼ皆無で、地域の脈絡に即したデータの蓄積が行われているとは言いがたい。我々はまだ見ぬアフリカの人口高齢化を社会動態全般のなかで語ることの必要性を感じており、現在のアフリカにおける高齢者と彼らを取り巻く社会のあり方を学ぶことを通して、西暦 2100 年のアフリカを構想するという「未来学としての高齢社会研究」を志向している。

このフォーラムでは、林が人口学の立場からアフリカの人口動態と健康問題を論じ、波佐間と野口が人類学的なフィールドワークに基づいた事例を検討する。最後にコメンテーターとして山本が公衆衛生学の立場から互助や共助に触れる。本フォーラムは文部科学省科学研究費補助金基盤研究 (B) 海外学術調査「東アフリカにおける「早すぎる高齢化」とケアの多様性をめぐる学際的研究」(代表：増田研・長崎大学) および厚生労働省科学研究費補助金「グローバルエイジングへの国境なき挑戦：経験の共有と尊重を支える日本発学際ネットワークによる提言に関する研究」(代表：田宮菜奈子・筑波大学) の成果の一部である。